

中 勘助  
文學者、明治十八年  
東京市生。

一四 沼のほとり

中 勘 助

この幾日、私はいかに幸にみちて飽くことを知らず、自然に親しんでゐたことぞ。これといつて見どころの無い、通りすがりのものなどは寧ろ失望させられるやうなこの邊の景色は、永い間こゝに落ちついて、朝夕よくその味をかみしめる者には、ありふれて地味ではあるが、なかなか捨てがたい一種のうまみを感じさせる。私は平凡な、人の好い人物のやうに、この沼べの自然を愛する。酷暑の來る前に、夏にしては涼し過ぎる、蒸し暑さのなかに冷えをさへ覺えるほどの不順な天氣がつゞいた。

辰巳

變幻

辰巳の方から沼の上を、灰色の雲の大きな塊が鱗のやうに重なりあつて、あとからあとへと低く襲つてくる。荒れ模様の風がかなり強く吹いて、沼が鉛色に波だち、汀の葦が、目に見えない大きな手で、束にしてはねぢられるやうに、ねぢくれ／＼靡いてゐる。さうして時々急に暗くなつたと思ふと、水の上が白く霧だつて、烈しい驟雨がくる。電光が閃いたり、胸のすくやうな雷鳴のすることもある。私はそれらの變幻極まりない自然の相に、いかに楽しく眺めいつたことであらう。

風の強くない日には、沼のこゝかしこに雨に濡れても、くをとる舟が出る。搔きとられたもく、が山もりに積み

潔癖



あげられる。草刈りよりは骨が折れるらしいが、そのかはりよい肥料になるのださうだ。そのまだるつこしいが、楽しみなやうな仕事を、ひとごとならず身をいれて眺めてゐる。それは、さうした根氣仕事に對する私の趣味、同情のほか、に、潔癖が見えもせぬ沼の底の綺麗になるのを喜んでゐるのである。歌になりさうな氣もちである。歌になりさうな氣もちである。とはいへそ

のまゝが歌であつた。さうして、それが嬉しかつた。私はことに夕暮をなつかしんで、縁に腰をかけ、柱に背をよせて、さまざまの思ひにふけりながら、無花果の葉が雨にぬれて、螢の火のつめたくもえそめるまでも、残りをしくながめてゐた。

そんなにして永いこと憂鬱なすさまじい日がつゞいたのち、この頃の酷烈な暑さが來た。沼は鎔銀のやうにとろりと湛へ、森も畑も青白くかすんで、光に白む空を燕が聲もなくとんでゐる。蟬があちこちに時をえがほにがざく／＼と鳴く。夏が來て、雲はみな憑かれたやうに動き出した。ことに、夕映の時には、千變萬化の色と形の驚

憂鬱

赫奕

異をあらはす。それは天の徳の顯現である。私は赫奕たる光輝と炎々たる暑熱に燃える盛夏を讚美する。それは黄金の甲冑をつけた火神の姿である。

夏の日が蜩の歌に送られて暮れてゆけば、空には露のやうに星がきらめきはじめる。私は入浴して汗と脂を洗ひ落したのち、縁に腰かけて夜氣にあたる。こんもりと繁りあつた夏木の間を螢がすい／＼と飛ぶ。机の上に置いた洋燈のまはりには灰みたいな細かい、いろいろな種類の蟲が、まつ黒に群つてくる。彼等は随分讀書や執筆の邪魔になるが、私は夏を愛するあまりに、彼等をさへ屢々愛すべきものとして、快く眺めてゐる。(沼のほとり)